【論文】

東亜同文書院生の「大旅行」の展開と記録された近代中国像

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長　**藤田　佳久**

1．はじめに

1901 年、清国末期の上海に近衞篤麿、荒尾精、根津一らがリーダーであった東亜同文会の手によって設立された東亜同文書院は、近衞会長の日清間の教育文化事業の交流という方針のもと、荒尾や根津によるそのための日清間提携の貿易人材を養成するというビジネススクールとして開設された。その大きな目的は両国の貿易発展を促すことが、清国の植民地化を進める列強に対して東アジアの安定につながるという構図のもと、手法としては、日本人学生に対しては、欧米の学問を吸収させるとともに、まず、徹底的な中国語を習得させ、買弁の手を通さなくても日清間で直接の貿易を可能にすること、次いで荒尾がすでに清国で経験した清国内で貿易可能な商品の発掘とその貿易取引を可能にするための清国各地の商慣習の修得にあった。荒尾は 1890 年にそのための日清貿易研究所というビジネススクール（東亜同文書院の前身）を上海に開設したほどであった。

また、書院へ入学した清国人学生に対しては、日本が吸収した欧米の学問、文化を教授するという方針であった。

清国側では劉坤一や張之洞らの指導者が、近衞による書院の清国内（南京）での設立を承諾歓迎し、書院は当初から清国の学生も含む日清両国学生の共学を目指した。しかし、学校が設立される前に、清国側からは留学生を書院へすぐ入学させたいという強い要望があり、それに対して急遽近衞が東京の自宅敷地内に東京同文書院として留学生用に開設し、清国側留学生を入学させたため、当初の南京での一時期を除くと、東亜同文書院は当初日本人だけの教育機関となった。のちには当初の中華学生部を併設し本来の日清共学体制を組んでいる。当時、日本政府の眼はもっぱら欧米に向けられており、その点からも清国からこのような公認の形で学校が設立されたことは画期的であった。

書院生により始まった清国内の大調査旅行は、書院のこのような日清間の貿易実務を担う人材養成のためのビジネススクールという性格のあらわれであった[1]。

この大旅行は後述のように 1907 年から 1943 年まで約半世紀にわたって続けられ、清国・中国から東南アジア、さらに旧満州（東北）、一部ソ連までほぼ 700 コースに及んだ。これだけのスケールでの文字通りの大調査旅行とその記録は世界でも例を見ない最大級である。そして、この報告記録は、20 世紀前半期の中国、東南アジア、旧満州の実態を客観的に記録した点で貴重であり、高く評価されてよい[2]。しかもこの大調査記録の成果は、アメリカが戦後流布させた地域研究を、その半世紀も前に書院が先行実

施したパイオニアとしての地域研究の証であった点はもっと高く評価されてもよい。

以上のようなこの大調査旅行については、戦後のイデオロギー時代、書院の実態も知らない観念的な研究者たちによって、書院はスパイ学校だったという見方が流布されたため、帰国してきた書院生や、内地にいた書院生は反発して口を割らず、書院についての研究はほとんどなされなかった。地理学専攻の筆者はその実績に驚嘆し、1980年代からただ一人で、手書きされた、時に読みにくい走り書きの大旅行記録の文章を読みこんだ[3]。そして 1989 年、ベルリンの壁が崩壊すると、このイデオロギー中心の向きが変えられ、書院の実像が客観視されるようになった。それでも当時、書院記念センターの若い研究者が東亜同文書院関係の論文を関係学会誌に投稿すると、観念的評価を前提としていた評者や編集者からまだ突っ返されたりもした。しかし、最近は書院に関心を持ち、客観的に見ようとする動きに変わっている。

戦前、日本が中国やアジアに対して多方面、多分野からのアプローチを行ったが、その中で最も広域で実証的方法により精緻な調査研究を蓄積したのが書院の大旅行記録だと位置づける事が出来る。筆者は地理学の立場から、この大旅行記録を中心にその実績を関係学会はもちろん、一般にも発表してきた。これまでそれらのうちから主要な調査旅行の原記録について、中国を主とし、東南アジア、旧満州へ広がる全 5 巻として活字化して出版（大明堂、現在、不二出版が一括取り扱っている）し、研究書も数冊（大明堂、ナカニシヤ出版、ほか）出版してきた[4]。また関係論文や研究報告も発表してきた（その詳細は略）。まだ　研究すべきことは沢山あるが、そのような動きの中で書院生の大旅行の存在も次第に知られるようになり、大旅行のダイジェスト版の出版やそれをベースにした紹介記事、そして概説的な研究も見られるようになった。[5]しかし、本格的に原資料を十分に踏まえた分析的レベルの研究は、筆者が試みてきたが、まだ十分とはいえない。そんな中でもそれを掘り下げようと試みた高木秀和の研究もあり、次のステップが期待される[6]。

今回は、筆者のこれまでの研究をベースにして、大旅行を中心に、その発端と経緯、実施方法とその展開過程、対象地域と研究対象の展開、大旅行が書院生に与えた影響、その研究成果と今日的評価、戦後の愛知大学への継承などについて明らかにし、地域的そして時代的意義について述べてみたい。

また、このような書院の大旅行や書院に関連したシンポジウムや研究会も 2000 年代に入ると開かれるようになり、1993 年に愛知大学に設立された愛知大学東亜同文書院大学記念センターが進める大型研究プロジェクトに文部省からの助成も得られるようになった。ベルリンの壁崩壊前には考えられないことであった。これを機会に多くの研究者などが、書院の大旅行そして東亜同文書院、そして近代中国および日中関係史の実態とその解明に関心を持ってもらえたらと願っている。

2.その契機－試行期－

開学当初の東亜同文書院（以下、書院）では、書院生に清国を理解させるのに集団的な旅行、のちの学校教育で取り入れられたまさに修学旅行のような方式で、一年生

は杭州から紹興、寧波方目への見学旅行、三年生になると、北京、天津、漢口などを巡った。当然もっと広く清国を知りたいと書院生からは不満と要望が出たが、若い設立者達の理想に燃えて誕生した民間の私立学校である書院には財政的ゆとりはなかった。そのため財政自立を目指し、入学生を各府県の給付金で選抜してもらい、優秀な学生を集めることに成功はしたが、財源は乏しかった。経営母体である東亜同文会の会長であった近衛篤麿は、若くして英語に堪能で、英米への留学を希望したが、明治政府はそれを認めず、結局オーストリアとプロシャ留学に変更させられている。近衛は元々薩長土肥からなる藩閥政治を行う明治政府が好きではなかったことへも明治政府側の対応であった。それ故、近衛は帰国後、貴族を育てるため学習院を育て、貴族を政府への対抗勢力にしようとした。したがって、藩閥政府である明治政府は、外務省も陸軍も近衛篤麿の支援にはあまり協力的でなく、近衛篤麿会長の東亜同文会は再三外務省に援助を求めるが、難しい状況がくりかえされた。また、近衛篤麿が同文書院を清国政府の承認を得て当初南京に同文書院を開設しようとした時も、日本政府の外務省と陸軍省からは冷たくあしらわれている。

よく書院についての日本の研究者が、外務省の金が出ているから東亜同文書院を国策学校だと位置づけ、また中国の研究者も同様に書院の外務省や軍部とのつながりを強調し、書院が国策学校だとし、だから日本帝国主義の先兵だと堂々と発表しているケースがあるが、これはいずれもイデオロギー的観念論先行による間違いであり、帝国主義という観念論の枠に放り込むことで物事を見えなくしてしまっている。近衛篤麿東亜同文会会長は、対清国との関係も含めて同会の政治的色彩を強く避けてきたし、院長になった根津一は、それ以上に書院生にずっと儒教精神を説く一方、金策に追われ走り回っていた。書院生が金の使い道を院長に糾弾してストライキに走ろうとした時も、院長は金の欠乏を素直に陳謝し、書院生の多くはそれを知って院長の努力に敬意を払ったほどである。

しかし、この修学旅行しか出来ない状況をうまく活用したのが当初の教員らであった。すなわち森、西田両教授は修学旅行の書院生をいくつかのグループに分け、清国の商慣習の調査課題を都市ごとに現地で指導して検討させ、書院生の眼を実体験に基づき開かせ、そのレポートは優れたレベルでまとめられた。そしてその成果を『支那経済全書、全 12 巻』[7]にまとめ、東亜同文会から出版した（図 1）。若い根岸も短期間

図 1　『支那経済全書』

ながらも書院生の原稿編集をサポートした。原稿はすべて書院生の報告書そのままを活用編集した内容であり、各論の著者は、正直に書院生の名前になっている。この全書は初の清国経済のエンサイクロペディアであり、少し前に荒尾精の清国漢口を中心として収集した資料を根津一が編集出版した『清国通商綜覧』[8]に次いで清国の実態をくまなく著した成果であった。これらの成果はそれまで長い間、漢詩、漢文でしか清国を知らなかった日本人にその実態を知らしめた点で、その功績は大きかった。この書院生の調査研究成果の編集で、根岸自身も育ち、戦後 1954 年、もっぱら多くの参考文献を編集的に組み合わせた著書『中国のギルド』[9]でギルドの歴史とその構造を明らかにし、学士院賞を授与されている。

この開学から数年間の修学旅行形態により指導されたこの時期を「大旅行の試行期」と呼んでよいだろう。第 1 期生から清国を商慣習実態の修得とそれを通して清国の実態にも触れることが出来たからである。

3.より直接的な契期

以上の試行期は全書院生の参加で行われ、森、西田の関係教員らの現地での指導力で成果を上げた。

その上に突然のハプニングが発生した。1902 年、日英同盟が結ばれると、イギリスは清国西域へのロシア勢力浸透の情報提供を日本政府に要求してきた。しかし、当時の日本政府はそれに対応する情報網はなく、苦慮した挙句、冷たく対応してきた東亜同文会が経営する上海の書院、根津院長に頼み込んできた。ロシアの対アジア戦略に危機感を持っていた近衞篤麿会長の意思も働いたかもしれない。

根津院長は 1905 年、第 2 期生の卒業を待ってそのうちから 5 人を選び、5 人別々に西域や外モンゴルへ派遣した。今は北京とウルムチは 3 時間の飛行時間で結ばれるが、当時は片道が徒歩で 1 年近くかかった。しかも天山山脈山麓の夏は、雪解け水により勢いを増した河川を渡れず、冬の凍結を待っての厳しい旅であった。早くもロシア人の追跡がつき、また熱病で死に直面したり、砂利道道路を馬車に乗るとすぐ痔になったりし、いずれも欧米の現地にいる宣教師たちに救われている。往復 2 年の大変な旅であった[10]。しかし、なんとか 5 人全員が無事帰還した。これが日本人による初めての本格的な西域調査であり、シルクロード調査であったことはもっと知られてよい(図 2)。

この帰還に書院生は大喜びし、大歓迎すると同時に、自分たちももっと広く清国を知りたいと各地への旅行を熱望した。しかし、書院にはそれを実現するための財政的余裕はなかった。そしてそんな状況下で、1907 年、外務省からのお礼として補助金 3 万円が書院へ届くという幸運があった。書院生はそれを知って、自分たちも旅行が出来そうだと歓迎した。

実際、当時の 3 万円では、最終学年の全員が旅行を実施するとして、3 年分の旅行が出来る金額だと目論まれた。そしてとりあえず、書院は 3 カ年分の旅行を実施することになった。これが大旅行の始まりになったのである。

図2　東亜同文書院第2期卒業生5人による外務省委託の西域、蒙古への踏査旅行コース（1905～1907年）
（波多野の日記、林出の回想文、東亜同文書院大学史より作成）

4.大調査旅行の展開

（1）その拡大期

こうして第 5 期生の最終学年に当たる1907 年、第 1 回の大旅行が実施されることになった。3 万円が書院へ入るや、6 月に実施を決めて準備に入り、7 月には出発という、すばやい実施への対応であった。それだけ書院生が清国内の未知なる世界を知りたいという要求が強く、書院側を強く動かしたのである。書院生の方が積極的にリードした状況であった。

その結果、大調査旅行はその後の満州事変までは書院生中心の企画による展開となったのである。この点も戦後のイデオロギー時代に観念的に、この大旅行は軍部に指導されたスパイ活動だとするような見方が日本、中国両方の研究者から主張、流布されたが、これらは前述したように、すべてずっとのちの日中戦争の時点や戦後の東西イデオロギーの時代の状況から全く観念的に推測されたものであり、当時の書院生のもっと自由な発想の中で清国各地に古典などをベースにしたロマンを求めようとした若い書院生達のエネルギーに満ちた世界を理解出来ていない。

書院生達は、早速気の合う者同士がグループを作った。具体的には、同県出身者同士の連合、同じクラブ員同士、寮の同室者同士など、日ごろの親密な関係が基本的なグループのベースになった。体力のある柔道部が奥地のコースを選ぶこともみられた。また目的地も各グループが決めた。その際、そこへ行くコースは、従来日本人が経験していないコースを選び、なるべく清国を広

く見聞できるように設定している。手段は自分の足での、徒歩だけで、コースによっては河船を一部使ったりした。この大旅行での調査報告書については、卒論に位置づけられ、記録内容については「真実を書くこと、理屈を書かないこと、出所不明なあいまいなことは書かないこと」という原則を各自に守らせた。この原則はその後の大旅行で継承され、それがこの調査報告書の客観的価値を高めた。

戦後まもなく、台湾中央研究院の林明徳教授は、その点で書院生の報告書は、フィルターがかけられた満鉄の報告書より優れている、と高く評価している。それを受けて黄福慶教授も書院と同文会から研究を始めている。

こうして実施された第 1 回の大旅行は、準備期間が短かったこともあって、北京から漢口、湖南の長沙、温州から広東、長沙から広東、河南から陝西そして西安へ、山東省一円などとその後のコースから見れば着実なコースを設定している。それでも清国中央部をほぼカバーしようとするコースの調整がみられる。なお、この第一回は急な実施であったため、脚気などで体力の都合や準備が出来なかったメンバーもあり、彼らは上海、漢口、広東と香港、営口、芝罘、天津、北京など各地の都市に駐在し、そこでの定点記録を残し、記録を深めている。これらの報告書の他，旅の紀行的日記は『東亜同文書院学友会報』に掲載され、その旅の様子が書院生全員に伝わり、後輩たちは大旅行参加へのロマンの思いを高揚させた。

第 2 回は準備期間もあり、コースは錬られ、11 に増え、コースもさらに伸びた。すなわち、熱河地方、包頭から大同そして宣化へ、徐州から済南そして特集へ、鄭州から襄陽そして常徳へ、重慶から成都へ、桂林から悟州そして広東へ、南昌から汕頭、そして広東へ、遼東から安東へ、九江から南昌そして長沙へ、貴陽から重慶へ、などの 11 コースと北京駐在の計 12 コースである。それらの紀行文は次の学友会誌に掲載された。多くは当時の日本人にとって初コースであり、書院生も張切った。それは報告書にも表れており、3 年のめどで終わる予定の大旅行は、書院生の力量が大いに発揮され、それらの内容が優れていたため、書院側は 3 年で打ち切らず、財源を切り詰めながら、さらに続けて行なうことになった。まさに書院生の大旅行にかけた力量が書院側に大旅行を継続させたのであり、軍部などの指導によって実施されたものではなかった。こうして書院側は厳しい財政状況の中、4 年目以降、大旅行用の予算を優先的に計上することになり、半世紀近くに及ぶ大旅行行事が書院の中で制度化されたのである。そしてこの制度化こそその後の書院の中国研究の基本となり、書院の存在感を高めていった。繰り返し言えば、それはまさに書院生が大旅行で示した主体的で彼らの優れた力量の賜物であったといえる。

第 3 回の 1909 年になると明らかに「大旅行」として制度化されたことが見えてくる。第 3 回は 80 余名が 13 コースを設定し、その広がりは清国全域に広がり、大旅行の紀行ダイジェスト版は『一日一信』のタイトルで学友会誌への収録でなく、独立冊子として刊行されている。これには学友会誌の出版が途絶えたこともあったとするが、学友雑誌が継続したとしても、これだけの分

量は収録できなくなったであろう。総ページ数は 467 まで達し、堂々たる刊行物で、学友会誌時代の 4 倍ほどの分量である。書院側も根津院長が題字を寄せ、また、根岸佶は巻頭言を寄せ、原稿はすでに合計５万枚に及んでいるとして、その実績を強調しつつ、書院生の編集委員会と一緒に第 3 回の出版に協力する態度を示した。

また、大旅行の各斑員のいでたちも、ひと目で外国人だとわかるようにヘルメット帽、白い夏の上着とズボン、ゲートル、水筒、靴、などに統一され、まるでアフリカ探検隊の姿のようであった（図 3)。そして

恒　武　大　岩　山　篠
見　田　崎　田　本　原

図 3　湘濁重要物産調査旅行

各斑に 1 台ずつドイツ・ライカ製のカメラが渡された。その記録は清国末期の各地の光景を撮影したものとして貴重である（図 4)。また、各斑員の役割も決まっていた。会計係は、統一貨幣のない時代、どこでも換金が出来るように小銀を紐でつないで吊るし、盗難を避けるためにそれを体へ巻きつけ、歩くにも重たく大変であった。しかも毎日の食事や食材、馬宿や旅館などでの泊料、途中の雇人夫代、などのやりくりの収支計算も担当した。財政の厳しい書院からの旅費は最低限であり、乗船時も船室に入れず、デッキパッセンジャーで、雨が降れば、清国の一般客と同様に甲板で雨にぬ

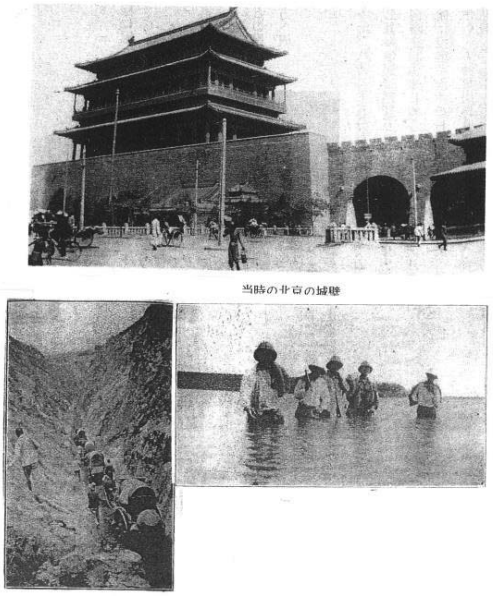


図 4 「大旅行」中の光景
上は、かつての北京城壁
左は、函谷関の急峻な谷を登山中。1922 年。
右は、紋水が氾濫する中を渉河中。1921 年。

れ、それらのことが、書院生に清国の庶民体験をさせることになった。

農民から食材を求めたりすることも農村出身者の多い書院生には当たり前にできた。今も中国でみられる農民蔑視などは書院生にはなかったのである。むしろ農民を理解し、農民を通じて清国に親しみを持ったりしたほどであった。また、衛生係は班員の健康に留意し、薬や介護用品などを持参した。長旅の疲れやこの時期が中部以南は雨季だったため体調を崩すメンバーもいた。のちに仁丹や味の素、ライオン歯磨き粉などの必携品がメーカーからもサービスされ、それを持つ書院生は各地の馬宿などで地元の人達から歓迎された。特に仁丹は健康薬として効果が大きく、人々は仁丹を欲しがり、病気の診断まで依頼され、時に妊婦まで押しかけてきたという。当時の農村医療の低さがうかがわれた。味の素は各地の知

事にあいさつする時の土産として喜ばれた。そして県知事は強盗団が出没するような危険なコースには護衛兵をつけてくれた。そんな護衛兵は多様であり、書院生は護衛兵と交流せざるをえない状況も生まれた。護衛兵の中には体調を崩した書院生を看病した例もみられた一方、強盗団に早がわりする例もあった。

このように、書院生の大旅行は農村国であった清国の農民とのあいだに交流が生まれ、のちに回を重ねるごとに同じコースも増え、書院生の大旅行もそのようなコース沿いでは農民たちに知られるようになったりした。また、日清戦争後、清国からの留学生が日本へ押しかけ、帰国後、各地の知事、辛亥革命後は軍閥のトップになったりする例も増えた。特に日本とつながりやすかった長江流域とその上流の四川省には、そのようなトップが多かった。書院生はそのような知事に会って交流したり、軍閥のトップを表敬訪問したりしている。

そのほか当然であるが、書院生の現地調査で清国の多くの商業組織の構成員や担当者、手工業者、官庁職員との間で様々な交流があった。当初、清国の各地には日本人がおらず、領事館もなかったため、自分たちの手で交渉し、聞き取りや資料の収集を実施せざるをえず、大変であった。書院で学んだ北京官話と筆談の世界であった。地方方言は多様であり、清国人自体も相互の会話は困難で、筆談は当たり前であった。その方言に魅せられ、その後、方言の言語研究に関心を持った卒業生も現れている。

このことは、とりわけ清末期はそうであるが、書院生は、まだ日本人の多くにとって未知の世界であった清国全域の大旅行を通じて、上海や大都市だけでない清国の実情に触れ、清国を初めて本格的に理解したといえる。そしてまた清国の人々も大旅行との接点があるコース沿いでは、書院生を通じてそれまで見たことのない日本人と書院を知り、書院生の考え方や行動そして持ち物などから日本の片鱗を知ったのである。当時の清国の農村では文盲が多く、そのような記録は地元には残っていないと思われるが、まさに草の根の交流の原点になったといえる。

以降、時に政治レベルから反日の動きが生じ、後に、大旅行を中断せざるを得ない年が一度あった。1925 年の五･三〇事件の時がそれで、出発後事件が発生し、現地では各地へ派遣されてきたオルグによって突然その旅行が妨害されたりしたが、申し込まれた討論会へは積極的に参加し、議論を交えている。大旅行は書院生のロマンとエネルギーによって継続されたのである。

ところで、1911 年 10 月、長江の武昌で始まった辛亥革命は、そのあと中華民国を成立させるが、その武昌の革命軍と清国軍の戦いの現場に、大旅行の帰路、書院の２班が差しかかり、巻き込まれたが、革命軍に彼らが書院生だとわかると敬意を表されて保護され、革命軍の武将達と酒を酌み交わし、漢詩を読んで舞い、交換している。その時の記録はまさにこの辛亥革命を記録した第一級の記録である。筆者はそれを広く知ってもらうために『日中に懸けるー東亜同文書院生の群像ー』（中日新聞社刊、1912）[11]の中で紹介した。見たもの観察したもの以外は書かないという大旅行の記録の原則がこの記録を価値あるものにしているとともに、書院生が辛亥革命の中枢とも接点を持

っていたという点は新鮮な驚きである。日常的な記録が多いとはいえ、大旅行記録の持つ価値はいたるところにあるといえる。

しかし、このような大旅行の持つ動態的、立体的、現場主義的視点からの研究は従来ほとんどなされていなかった。それは繰り返すが、書院の実態も確認せず、スパイ学校というようなイデオロギーと観念的な視点が「大旅行」の価値と面白さを密閉させてきたからである。書院の大旅行記録はそのような観念論をもっとも排除してきた調査記録であるにも係わらずである。

この辛亥革命によって、清国は中華民国と国名を変えたが、革命を進めた孫文は大統領になれず、さらに混乱が続き、省を単位として独立をめざした軍閥が割拠し、実質的な国家のまとまりはなかった。人々は自分を出身省名で呼んだ。

そのような変化の中でも、東亜同文書院は従来通り存続し、大旅行も継続した。

（2）円熟期

東亜同文書院のキャンパスは、清国人、のち中国人と接するという原則の下、上海の租界外に作られた。開設時は南部の黄浦江沿いの桂墅里におかれたが、清軍と革命軍の戦火が飛び火して校舎は焼失し、次に北部に位置する虹口の外接部のハスケル路に移転（1913）した。翌年、従来からの、政治科と商務科のほかに新たに農工科を設け、自然科学領域へも分野を広げている。しかし、ここは手狭になり、西部のフランス租界の外である徐家匯に新校舎を設立した（1915）。そして、本来念願の中華学生部もここへ併設したが、折からの不況による財政難で農工科を閉鎖している。

この新キャンパス時代は充実し、この後、1937年の第2次上海事変で放火され焼失するまでの20年余りは、高等専門学校としての4年制への移行発展もあり、支那研究部が設立され、ビジネス部門に加え学問研究が進展した。アカデミズムへの指向である。書院にとって円熟期であった。しかし、新たな民国時代は軍閥による政権争いとそこからも生まれた土匪による社会不安の高まる時代で、なお国のまとまりを欠いていた。のちに蒋介石が北伐に乗り出し、国のまとまりを作ろうとするが、日中戦争がはじまり、混乱がさらにつづいた。

そのような中、1916年から、それまでの大旅行による調査報告書の蓄積をふまえ、『支那省別全誌』全18巻[12]の刊行が始まり、地理学的視点を入れた世界初のこの省別地誌を誕生させた（図 5）書院生の大旅行が

図 5　『支那省別全誌』

なければ出来なかった成果である。

それも弾みとなって、大旅行はさらに活発に行われた。大きな変化もみられた。そ

れまでは、現地調査はもちろん実施したが、日本人の学生にとっての未開コースへの冒険的ロマンヅ求める大旅行という意気込みもかなり強く、その達成感も大きかった。それらが 200 コースを越えるあたりから、未開コースは先輩たちによって踏査し尽くされ、後輩たちは調査内容へと比重がかかっていくようになった。そしてそれまでの商業組織や金融、諸産業、商品研究などの経済的分野に加え、教育、人口、移民、民族、社会組織、飢饉、災害などと調査対象が幅広く展開することになった。より正面から民国内の事象をとらえ、分析の試みをしようという傾向が出てきた。大旅行で大調査旅行を経験した書院卒で経済地理学を担当した馬場鍬太郎教授の示唆もあったと思われるが、4 年制になり、より民国の現実を知るチャンスが増えた書院生の自信意識への変化があったものと考えられる。

そしてもう一つは、東南アジア各地へのコースの増大である（図 6）。これは自然の成り行きもあった。すでに華南地方の調査では香港訪問は不可欠であり、広く華僑問題が研究課題として存在していた。また雲南調査では、上海から海路を南下した後、ハイフォンへ上陸し、ハノイ経由でフランスが建設した鉄道で老開から昆明へ入るのが便利であった。そのため、当時のフランス領インドシナを通過するときは植民地宗主国フランスの官憲や兵のチェックがあり、彼らの高圧ぶりに書院生は不満を高めていた。旅行日誌には、フランス人と旅行上の交渉で対抗するためには、フランス語をマスターせよと後輩達に書き送っている。

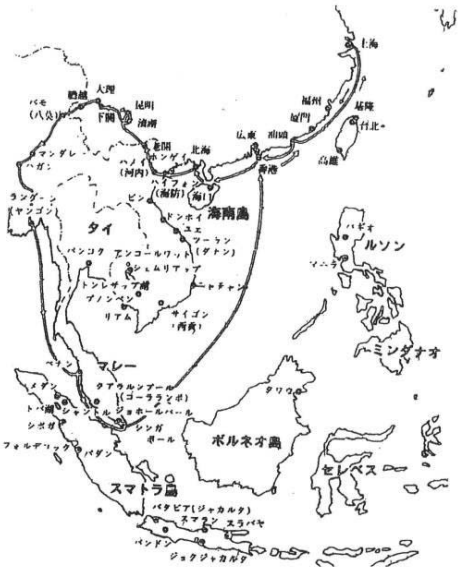


図 6　雲南ビルマコースと昆明から八莫へのコース

また 25 期の安沢グループが雲南から土匪出没のため、北上の進路を断たれ、最大難関コースが次々と織りなす雲南省奥地の急峻な大渓谷と山岳地帯を、峡谷では鉄線にぶら下がって横断し、やっとビルマへたどり着き、シンガポール経由で帰校した一大冒険も書院生の胸をおどらせたに違いなかった。

それが植民地下の東南アジアに対して、書院生の眼を開かせることになり、東南アジアへそれまで以上の本格的な調査旅行が始まったのである。もうひとつは、民国内での反日の動きが大旅行の遂行に影響したこと、軍閥間の戦争、やがて蒋介石による軍閥間対峙の戦争など、国内戦争に明け暮れる民国内の状況を嫌った書院生の東南アジアへの指向でもあった。

こうした東南アジアコースは書院生にタイ以外の植民地の実態を実感させた。地元民に独立を許さない植民地政策の綿密なシステムと地域内のそして本国とのネットワークのための高度なインフラ整備状況を知って舌を巻いている。それが民国とのもっ

とも大きな違いであった。その一方、多くの日本人が商業や農業などで東南アジア地域の隅々に入り込み、地元民の尊敬を集めて地域のリーダーになっていたことも新鮮であった。そのため大旅行はそんな日本人のリーダーのおかげでスムーズであった。日露戦争に勝った日本人に対して、そこには植民地下の地域の人々の思いが表れていた。しかし、そのあとの太平洋戦争は、このような現地で活躍する日本人と植民地下の現地住民との緊密なネットワークをつぶしてしまった。明らかに日本の軍部では、書院生の調査報告は全く読まれていなかったといえる。

そのほかでは、新生ソ連への書院生の関心が高かったこともあげられ、なんどもビザの申請を試みるがうまくいかなかった。しかし、満州や朝鮮の北端からポシェトやウラジオストック方面へは問題なく出かけられ、新生国の雰囲気を少しでも知ろうとしている。

（3）制約期

円熟期でさらに充実した大旅行がアカデミックな方向も加え、多面的に発展する中で、突如起こった満州事変（1931）は、書院生の大旅行に大きな影響を与えた。民国政府はそれまで書院生に発行していたビザを 2 年間停止したからである。民国の奥地旅行などへの準備で張りきっていた書院生は戸惑った。旅行できる地域は満州だけに限られてしまったからである。書院側もやむを得ず、その満州内だけでの旅行を実施する方法をとった。各地への予定を立てていた書院生は満州旅行をいやいやながら受け入れざるを得なかったのである。

予備調査なしでの突然の満州調査は、満鉄路線の利用に集中し、各斑は錯綜し、混乱した。そこで翌年は、書院側の指導もあって、各班が希望する県別の個別的調査を行った。濃淡の差はあれ、これによって、満州の実情を一瞥することは出来たが、当時、民国側の現地組織は形だけで、実質的な行政の整備は遅れていたため、データを集めようにもデータを欠くことが多かった。そのため書院生のフイールドワークが試されることになったが、これも満州の行政組織が不十分なことを現地で知ったケースが多く、自力の現地調査と満鉄の資料を用いて形を作るケースもみられた。吉林省の一部地域を除いて県単位の行政間の精粗の差は大きかった。それゆえであろう、翌年に満州国が成立したこともあって、満州の農業など将来の可能性を見ようという観点からの調査報告もみられるようになった。

そして、3 年目にビザが発行されると、一部満州調査も残ったものの、多くは再び民国各地を巡った。

しかし、その後、日中戦争がはじまると、再び、大旅行はコースが制約された。中には四川の成都までコースを設定し、実現した班もあったが、やがて安全上、日本軍の勢力範囲内に限定されていった。

そんな中、第 2 次上海事変が起こり、最も活気に満ちていた時代の校舎が中国兵士の放火により、焼失するという一大惨事が生じた（1917）。大旅行記録原稿 20 万枚、広く全国から集めた商品見本 10 万点が略奪され、放火焼失した。戦争による悲劇であった。書院生は一旦、長崎へ引き上げ、書院も北京への進出立地を含め大きな新しいプロジェクト構想をもつたが、戦時下の

資金不足のため、結局、隣接していて避難民の場になっていた上海交通大学を借用するという形をとり、借用中の校舎を汚さず利用する事が鉄則として守られた。そして書院の再生発展を大学への昇格で実現した。大学への昇格は長年の中国研究が結実したものといえ、焼失した図書の整備については日本本土や満州、民国下のさまざまな機関が協力したほか、民国側の機関の協力もあって、すぐ 6 万冊を越えた。書院が高く評価されていた証といえた。

その結果、大旅行は学部ゼミ単位に行われるようになり、一気に学術的雰囲気を高めた。しかし、戦争下にあってテーマは限定された範囲の中での実地研究とならざるをえなかった。

一方、それまでの書院の行き方への評価も高く、その伝統を保持するために書院に専門部が付属設立され、150 人ほどの書院生が入学した。彼らは伝統の大旅行を内蒙古などでフィールドにし、個別には 1944 年まで行なった。

1943 年（昭和 18 年）、それまでリベラルな学風を守り、軍事訓練も拒絶してきた書院は、この時、軍部と上海居留民団の圧力により、日本内地の大学と同様に学徒出陣を受け入れざるを得なくなった。卒業年次の切り上げや授業の切り上げで出征する上級生から順番に校舎を去った。多くは通訳従軍であったが、書院生には不本意であった。前述の校舎焼失による長崎引き上げ時には、書院生に親身になって華語の授業を教えていた中国人の教師が自殺するという悲劇があり、書院生はショックを受けた。書院は最後の段階になって国策に揺さぶられたのである。

そして、さらなるその後の書院生の大旅行の報告書の蓄積を受けて『新修支那省別全誌』全 23 巻が企画され、戦後に出版された 1 巻を含め、企画の半分の 9 巻を出版したところで戦争により断絶してしまった[13]。印刷直前の版下が東京空襲でほとんど焼失してしまったためである。前のシリーズに比べるとより進化が明らかな内容であっただけに、残念なことであった。

なお、終戦の年、最後の院長で、学長であった本間喜一は、海を渡れなくなった新入生のために東亜同文書院大学の分校を富山県の呉羽に設置した。そして教え子を戦場へ送って教育の機会を奪ったとして責任を痛感した本間喜一学長・院長は、その後に復帰してきた書院生たちのために東亜同文書院大学を引き継ぐ形で愛知県豊橋市に愛知大学を設立して彼らを受け入れ、就学の責任を果たした。しかし、初代学長にはならず、二代目から愛知大学の学長に就任している。

（4）大旅行の全体像

以上、時期を分けた大旅行の内容について紹介してきた。それを最後に全体として見てみると、次のようになる。

参加者数は初期の修学旅行 4 期生分約 300 人を入れて、5000 人に及ぶ。そして当時の軍閥同士の戦争や多発する強盗団の土匪や馬賊の社会不安の中で、戦場で敵兵として間違えられて捕えられたり、土匪に危うく命を奪われそうになったりという経験もしながら、公式の大旅行ではそれによってだれひとり命を奪われたものはいなかった。それは神話伝説のように書院生に語り継がれた。ただし、のちに開設された専門

部の書院生一人が内蒙古を個人旅行中、流れ弾に当たって落命する事故があった。

総コース数は判明分で 660 あまり。ただしこれは 1944 年の専門部のコースを含んでいないため、全体では 700 以上にも及んだ。その対象地域の多くは清国と民国のメインランドで、それに満州と東南アジアが次いだ。

そのうち、図 7 は中国メインランドでの

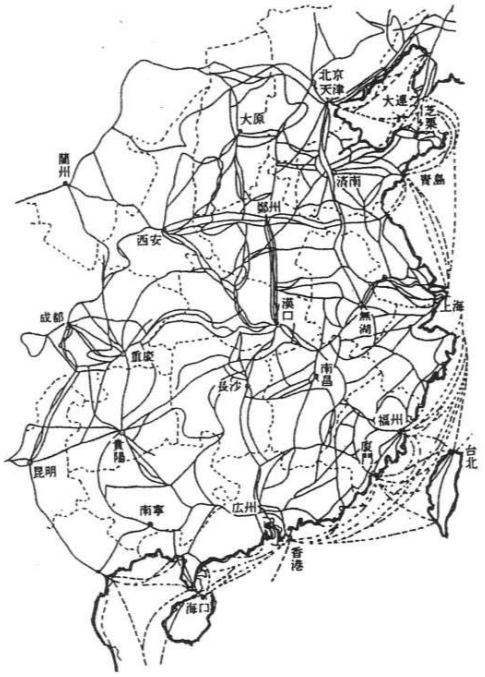


図 7　第 5 期～第 23 期のコース図（実線）

大旅行コースを全体の約半分、第 5 期生から 23 期生の分だけを示した。かなりの密度でコースが設定され、若き書院生がロマンとエネルギーをもやした軌跡を示している。

5.大旅行が記録した清末と民国時代の地域像

書院生は実際に現地を徒歩で歩いており、多くの見聞や観察そして調査を行っている。そのような中で若干のそれらの記録からごく簡潔ではあるが、当時の地域像を示してみる。

(1) 軍閥のダイナミクス－混乱と近代化－

辛亥革命後の混乱は、それまでの清国時代の管理、秩序が崩れ、新政権も全域に力を発揮できなかった中で、各地に地方政府である軍閥を生んだ。それらは多くの場合、省を単位としており、省域の伝統性がみられ、人々が出身省を名乗る背景にもなっていた。と同時に、まさに戦国時代であったため、天下統一を目指す軍閥がその勢力を拡大するために、自分の省に重税を課したり（例、山東軍閥）、農民や馬を挑発したりして、となりの省へ攻め込んだり（例　陝西や広西軍閥）、連合したりと混乱を拡大した。そのため難民や敗残兵が生まれ、それがかつては黄河の下流の氾濫による食いはぐれた農民に加わり、全国的な強盗団、土匪へと姿を変えた。華北や満州では馬賊に加わり、町や村が襲われ、焼かれ、社会不安を増幅させた。図 8 は、書院生の記録の

図 8　旅行コースに記された土匪の出没地

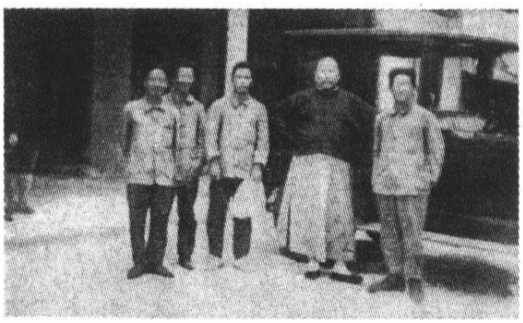
中からかれらが出会ったり、至近距離になった土匪賊の出没地を分布図として示したものである。訪ねた県知事からは必ず土匪情報が与えられ、より危険な時は、知事の指示により警備兵が一行を護衛するケースも多かった。土匪は全国に蔓延し、書院生にとっても最大の注意事項であった。図からは特に省界沿いに多いことが分かる。軍閥の省間の争いがもたらしたものであり、各省の中央から離れていることが土匪にとって好条件であった。

そのような状況がさらに流動化していく。書院生はそのような中で、知事はもちろん、軍閥のリーダーたちへも訪問し、揮毫をもらったりしている（図 9）。そのような書院生の記録から、軍閥の勢力状況を復元したのが図 10 である。解説は省くが、省単位を

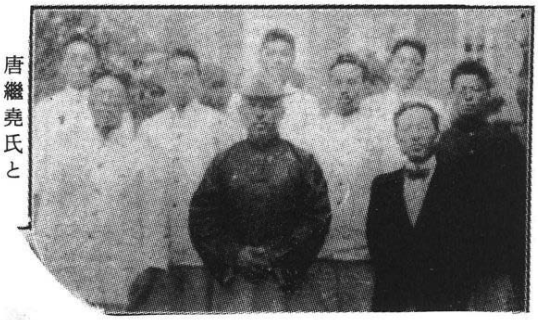
図 10　1923～1924 年夏までの地方軍閥の領域と抗争図（旅行日記ほかより作成）
（注）当時の省界を示す。

越え、再編の過程が分かる。しかしこの後、最大勢力の呉佩孚がこの直後に崩壊するなど、なお流動的で、孫文の勢力はまだ広東の一角にしか現れていない。しかし混乱期

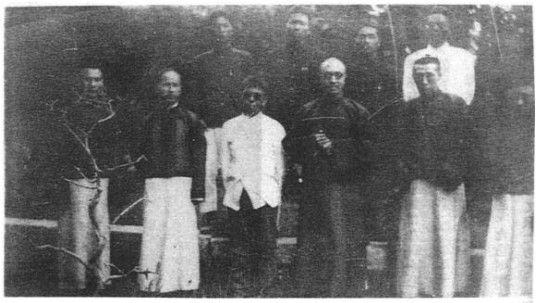
図 9　第 21 期生旅行誌
『彩雲光霞』へ寄せられた曹錕(左)と呉佩孚



馬福祥閣下とともに（班員撮影）　（班員撮影）



唐継堯氏と



襄陽県にて知事（前列右から３人目）らとともに

ゆえに事の本質が浮かび上がることは多い。山西省を除けば、省を越えた地域のつながりが浮かび上がり始めている。

しかし、この軍閥は全て戦争を目指した

わけではなかった。山西モンロー主義というように、山西省軍閥の閻将軍は、のちに蒋介石に屈服するまで日本流の省内の治安と安定の施策を進め、書院生は教育の普及ぶりをはじめ、夜でも女性が独り歩きできる安全性の確保、そして省内を結ぶバス網が最も整備されていることなどに敬服している。また広い四川省では 3 軍閥が勢力空間を棲み分け、住民に支持されるように、車道整備やそれまでになかった都市の道路整備のほか公園、図書館など公共空間や施設の新設整備を競って進めている。図 11 は

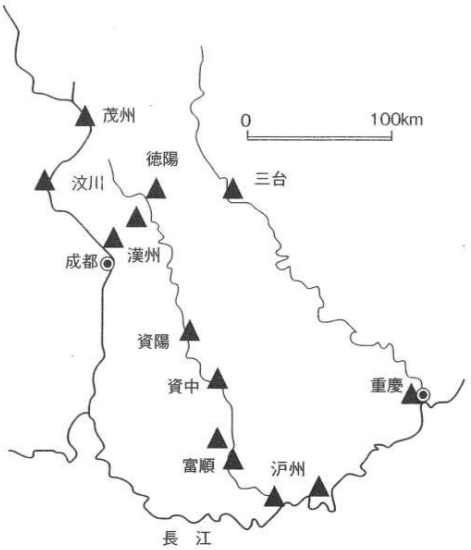


図 11　四川省の調査旅行中に観察された近代化工事が進んでいた町の分布図（三角印）（旅行日誌より作成）

そんな一端を四川省東部について示した。これらの軍閥はまさに地方政府が地元の近代化を推し進めたのであり、民国時代の近代化を全国的な混乱期のなかでも推し進めていたことがわかる。そしてこれらの軍閥の指導者はみな日本への留学経験者であったことも興味深い。

(2)　経済圏と文化圏

書院生は目的地だけでなくコース沿い地域の記録も行い、少なくとも点状だけではなく線状の記録を再現でき、それを広げると面状の再現も可能になる。

たとえば、当時の統一貨幣のない時代。会計係には切実な問題になる各地の貨幣の種類を記録しており、それらから共通貨幣の分布域を示すと当時の経済圏が浮かび上がってくる。また方言言語についても同様に分布域を示して、共通域を示すと、言語圏と同時に文化圏を浮かび上がらせることができる。図 12 はその両方を重ねて示した

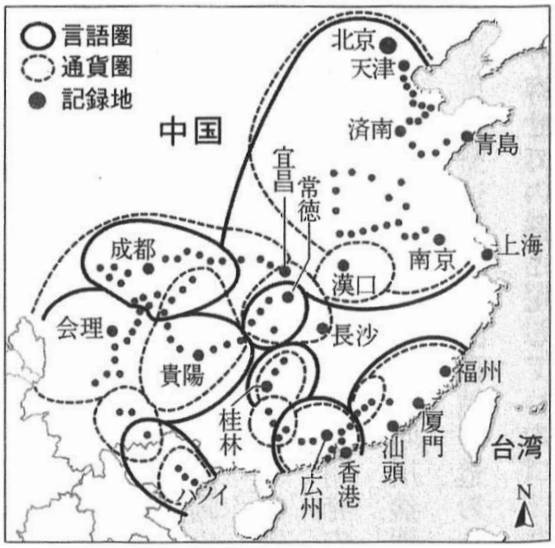


図 12　書院生の調査から作成した言語圏・通貨圏

もので、両者の重なりがかなり顕著にみられる。これは経済圏と文化圏が重層化して浮かび上がっていることを示し、伝統的な強固な圏域の存在を示している。この各圏域が清国から民国期の地域単位となり、前述した軍閥たちによる地方政府支配域のベースになったといえる。この状況は今日の中国においてもかなり意味のある地域のまとまりであり、中国の伝統的な地域構成の

基本だと認識できよう。

また、図 13 は前述した四川省の昆明から

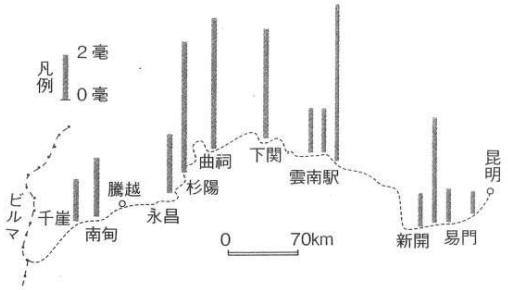


図 13　雲南からビルマへ道路沿いの観察した町村における米 1 斤当たりの販売価格（1927）

山岳越でビルマへ抜けた 25 期生の安沢隆雄氏によるコース沿いの集落ごとでの物価調査のデータをもとに、集落ごとの米 1 斤あたりの価格を示した。かなり価格差があるが、価格の高まりは需要地で、地域の中心地であり、店舗もあって局地的誌条件を示している。それが盆地ごとのコースの道路沿いに並列的に配置していることが分かる。安沢グループは当初、省内のメインルートではなく山間のコースをたどった。そこでは店舗のない、丘の上などで開催される定期市を観察している。その分布図はいずれも集落から離れ、しかし集落の間の中間点を立地地点として配置されていることに、定期市の原理が分かる。かつて G.W.Skinner が四川盆地で定期市の研究を行い、各市場圏が六角形モデルで説明できるベースを作った[14]が、ここでは地形的制約で、線上の市場圏になっていることがわかる。このように、書院生のデータは視点と使い方によってあらたな地域像を描き出すことができる。

(3)「五・三〇事件」とナショナリズム

1925 年、上海で、日本の紡績工場で働く労働者が該当デモに繰り出し、それをイギリスの警察が銃で撃ち、多くの死傷者が出る事件があった。ちょうどこの年の書院生が大旅行に出かけた直後であった。そのような状況もわからない書院生は、コースによっては　突然コース沿いの宿が宿泊を拒否したり、買い物で商品を売ってもらえず、また石などをぶつけられたりして面喰らっている。たとえば、内蒙古のオルドス砂漠を黄河沿いに南下していた班もそのような例で、こんな小さな砂漠の町で一体何が起こったのかとやはり面喰らっている。この小さな砂漠の中の町では、小学生がなにもわからず反日、反英、排外などの叫び声をあげて行進しているのに出くわしている。若者がそのスローガンを懸命に言わせて行進させていること、書院生を見て、商店に商品を売らないように店に命令し、脅していること、などにびっくりしている。若者は他所からやってきたオルグであった。書院生のコースを先読みし、より先回りをして行く先々の商店や宿をおどし、書院生への商品の販売や宿泊拒否への誘導をはかったのも見ている。そのため書院生は疲れ、腹をすかせながら、事態を懸命に理解しようとしている。所によってはオルグから討論会に出るよう誘われ、討論には積極的に出て議論し、それなりに相互理解をしている。

このような書院生が来るのを待っていたかのように小さな町まで五・三〇事件の影響が拡大していることに、当然書院生は驚き、それらに出会ったことを記録している。図 14 はその記録の地点を分布図に作成し示した。書院生が実際に出会った運動だけを示しており、発生したすべての地点をカ

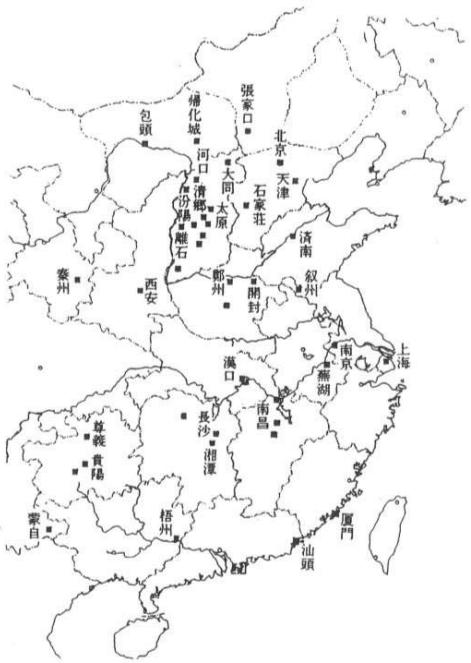


図 14　旅行コースに記された排日・排英・排外運動がみられた都市

バーしているわけではないが、書院生のコースはかなり広がっているので、そのかなりの部分をカバーしているとみてよい。それによると華北と華中を中心に、都市部だけでなく、農村の一部にも広がっている。反日の運動もおこり、都市部では日本企業の焼き討ち、日本商品の不買運動なども起こり、先般の尖閣問題の中国での反日暴動や日本商品の不買運動には先行的事例のあったことがわかる。　前述のような小学生の行列レベルもあるが、これは五・四運動の広がりよりも全国的であり、この五・三〇事件は、それまで国家意識が薄弱であった人々に初めてナショナリズムの芽を植え付けたといえる。情報網の弱い時代、前述のようなオルグの広宣活動が、スローガン中心の手法により、広まったこともうかがわれる。辛亥革命もその情報戦に清国軍が敗れた面もあった。この手法は、広い地域をカバーする手法として生み出されたといえ、戦後の中国も、国内にあふれるほどのこのスローガンの手法を踏襲しているように見える。それにしてもオルグはどのような連中が担ったのかは明らかではない。

6 .大旅行の意義―むすびに代えて―

最後に、この大旅行の意義・価値などについて簡潔に見てみる。

(1)　書院生の評価

この大旅行について、当の書院生はどのような感想、評価をしたかについて、かつて筆者が 1995 年に行ったアンケート調査から見てみる[15]。当時は多くの卒業生が存命であり、多くの項目に 400 人近くの卒業生の協力を得たが、十分旅行が出来なかった 42 期生以降は省いてある。大旅行にもいくつかの設問を行い、ここではそのうちいくつかの項目の回答を挙げる。

表 1 は、大旅行への期待についての回答で、期別にまとめた。各期の数字は入学年

表 1　「大旅行」への期待

内　容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
現地の人々と直接交流	6	4	3	6	7	2	6	34
中国の実践をより深く知る	3		3	4	4	2	1	17
大陸雄飛の夢と冒険	3			2			3	8
大陸をより広く知りたい	4	1	3	5	2	1	11	27
未知へのあこがれ				5	1		1	7
北京語がどこまで通用するか			1		1	1		3
方言を知りたい			1			1		2
期待と不安				2	2	1		5
戦時下で希望コースが実現できるのか				2	2	1	6	11
仲間意識を育てたい					1			1
自由に動きたい							1	1
東南アジアへ行きたい					1			1
満州への期待					1			1
これで書院生になれる					1			1
そ　の　他					1			1
義　務　感					1		1	2
あまり期待せず	1	3		2	4	1	2	13
無　記　入	8	1	5	20	7	3	1	45
合　計	25	9	16	48	36	13	33	180

（1995 年アンケートより作成）

と一致する。たとえば、20 期生は 1920 年入学生である。期別に示したのは流動する時代背景が異なるからである。それによると、現地の人達との交流や現地を広くよく知りたい、夢と冒険などへの期待が大きく、多かったことが分かる。希望コースへの懸念では、満州事変以降の期に多く、日中戦

争がはじまった 41 期生の中に不安があったことが分かる。また、表 2 は大旅行コースの選定方法である。ほとんど書院生による自主性で決定したことが分かり。決してスパイのための軍部からの要請ではなかったことがはっきりしている。それだけに書院生は軍閥間の戦争や日中間の緊張によるコースの制約に不本意さを抱いている。また、この大旅行を通して、民国をどう見たかという点を表 3 に示した。広大な大地はよくわかるとして、大衆の貧しさ、たくましさ、温和な領民などは、現地での農民との交流から生まれたリアルな回答だといえる。

表 2　「大旅行」による中国への理解内容

内　容	期 ～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
広　大、雄　大	3	3	6	6	13	6	5	42
大衆の貧しさと苦労	1		1	1	1	2	3	9
大衆のたくましさ、エネルギー		1		7	2			10
得体の知れぬ民族性の奥深さ				2	2		3	7
地域と民族の多様性				3	1		1	5
言語と民族の多様性		1		4		1		6
温 和 な 良 民	1	4	1	1		3		10
日中友好への共感		1		2			1	4
文明の 地域差	1	1	1					3
未　開　性		2	1	1	1			5
政治的不統一性	4	2			2			8
生活様式と地縁社会	1	1						2
日本の対支政策へ疑問				1				1
満州国は 大 変		1						1
抗日運動にショック		1			1			2
農村を見る重要性				1			2	3
そ　の　他				1			2	3
理解できてない		1		3	5		4	13
無　記　入	8	4	4	12	6	8	9	51
合　計	19	23	14	45	34	20	30	185

（1995 年アンケートより作成）

表 3　「大旅行」コース選定の理由

内　容	期 ～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
テーマによる	5	3	1	6	3	6	7	31
行きたい地域を選ぶ		3	1	8	10	1	3	26
教授や学校の助言、指導		1	5	4		2	2	14
班員の希望による	2			6	4		1	13
排日や戦争でコースが限定された		8	8	1	2	2	2	23
体力と効率上から選ぶ	1				1	1		3
偶 然 決 っ た					2			2
大体決めていた		2						2
そ　の　他		1	1		1			3
忘　れ　た					2		4	6
無記入、不明	6	5	5	16	8	7	4	51
合　計	14	23	21	41	33	19	23	174

（1995 年アンケートより作成）

旅行中は南京虫、虱、ノミ、マラリア、旅費不足などの苦しい点も感じながら、大旅行の良かった点を挙げている。前述の広い見聞が出来たことや現地に人々との交流が出来たことのほかに、先輩からの歓迎などが挙げられている。この時期には多くの先輩が各地の各分野で活躍するようになり、彼らを訪ねることで資金不足の援助をしてもらったり、地域の情報、調査研究関係の便宜を図ってもらったりしたからである。そして、この大旅行の経験がその後の人生へ及ぼした影響も大きく、中国への関心の強まりを含め、人生への自信、チャレンジ精神の高まり、そして広い視点など、前向きで積極的な影響が多い（表 4）。

表 4　「大旅行」のその後の人生への影響

内　容	期 ～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
自 信 がついた	1	1	1	5	4		1	13
苦難を乗り越えられる	1	1		2	1			5
チャレンジ精神		2		2	2			6
中国への親しみ			5	1			3	9
中国人に接し知った		1	1	3	1			6
中国人への理解	1						1	2
もっと中国語を勉強	2				1			3
広 い 視 野			1	2		2	2	7
人 生 も 旅 行				1	1	1	1	4
協　調　性	1	1			1			3
体力の限界を知る	2			1	1			4
友 を 得 た	1		1		4		2	8
就　職　先		2		1				3
判断力、考え方		2	1					3
外国旅行の楽しさ				2	1	2		5
自　主　性				2				2
安　堵　感				2				2
とくにはない		2	2	4	4	4	4	20
無　記　入	7	14	5	19	12	10	13	80
合　計	16	26	17	47	33	19	27	185

（1995 年アンケートより作成）

総じていえば、大旅行は、書院生に中国や東南アジアの新しい世界を知らしめ、しかも苦しくもあったが、長旅を成し遂げたことからくる自信をもたらしたといえそうである。筆者の仮説では、その国際的自信こそが、戦後の日本経済を貿易商社などのリーダーとして育ち、日本の高度経済成長を支える原動力になったものと考えている[16]（図 15）。

図 15　新年の賀詞交換会での「大旅行の歌」の大合唱。(1998.1)
（戦後の日本経済を支えた書院卒業生たち）

（2）研究対象としての価値

以上、大旅行を中心にこれまで行ってきた研究成果をふまえ、わかりやすく紹介してみた。

筆者がこの大旅行に注目し旅行記録を読み始めたのは、1980 年代はじめであり、すでに 40 年ほどの時間がたっている。その中でこの大旅行記録の価値を認め、広く知ってもらうために 90 年代は大旅行記録の活字化のための作業に専念した。しかし、そう簡単にはいかず。最後の 5 巻目の満州記録の観光は2011年にまでずれこんでしまった。その間に何冊かの研究書も出版できた。

しかし、残念であったことは、彼ら書院生のエネルギーはこれだけの膨大な実地のしかも客観的な記録を生みだしながら、戦後のイデオロギー的世界の中で、当初、光さえ当てらなかったことである。筆者は地理学の立場から、この記録に出会ったとき、すぐに関心を持ち、その価値が多大であることもすぐに理解できた。そして記録の信憑性の裏づけのために、まだ中国が経済成長する前の時期に、現地事情により予備調査が十分できなかった特定の班のコースを 10 日間追跡してたどり、その出来栄えを確証し、これに光を当てることの価値も確信した。そして併せてこれだけの事業を行った書院生、そして東亜同文書院にも強い関心を持つに至った。

それからの 40 年間、筆者はこの膨大な大旅行記録の世界の中を一人歩んできた。それはまるで記録した書院生にガイドされるかのように、記録の中で、筆者も大旅行を一緒に体験出来たことである。それは大変な作業でもあったが、楽しい経験であった。

その評価の最大の点は、今世紀前半期の特に清末から民国期の記録された実態は、長い歴史の展開してきた舞台、基盤を描いており、現在の中国のベースを知るうえでは大変重要であることである。今日、交通や通信の発達でかつての情報レベルとは比較にならないほど進展しているが、伝統的な地域単位はそう簡単に崩れるわけではなく、受け継がれている。辛亥革命後、1930 年前半までは清国時代からの伝統の中に、欧米や日本の資本進出を受け、金融機関の近代化と伝統的銭荘などの併存、それに伴う民国企業の創設など、部分的に資本主義システムが展開した面もあった。今回は触れなかったが、記録はそのような実態にも触れている。

その後、日中戦争、続いて国民党と共産党との戦い、などの混乱期を経て、中華人民共和国が成立するが、そのシステムはそれまでとまったく異なり、文化大革命はさらに人心を含め混乱を強めた。改革開放後の中国は、経済中心政策で資本主義システムを取り入れるが、いきなり欧米日のシステムの資本主義を丸受け出来たわけではなく、1930 年代との接合がまずは必要であった。戦前の経済における外国資本の進出は、

1980 年代以降、経済特区の設定という準備期間を経て導入を図り、苦力は民工に形を変えただけで原理は変わらない。インテリ層と農民の乖離も変わらない。規制枠も少しずつ自由化され、民間企業も育つようになった。庶民もかつての都市住民の一部は富裕層であった。現象のウェイトは少し変わっているが、原理はあまり変わっていないようにみえる。とすると、書院生の大旅行記録は、今の中国のダイナミクスの原理を理解するうえで重要な鍵を提供しているように思える。そこにもこの大旅行記録の価値を見いだせるであろう。

（3）　そして評価

この大旅行記録は、戦後、敗戦国の日本が、戦前の民国や東南アジアを記録対象としているということで、イデオロギー的に日本国内はもとより、中国や欧米でも無視されてきた。そんな中で戦後すぐ、前述した台湾中央研究院の林明徳教授は、まず省別全誌の 2 回にわたるシリーズを高く評価し、その後はこの大旅行記録も評価している[17]。書院生の大旅行記録に対する最初の国際的評価であった。その後、アメリカやフランスの研究者も評価するようになった[18]が、日本語の壁は厚い。中国でも 20 年ほど前、省別全誌のうち陝西省分が中国語訳され、近年は中国の研究者による研究もみられるようになった。今日、中国国家図書館は、かつてとは異なり、これら書院の出版物の復刻や大旅行記録の影印本を次々に出版しており、中国での研究も進みそうである。あわせて書院への位置付けも変化したように見える。

これらの研究は必ず、タイトルやその一部に「日本帝国主義下」の大旅行と位置づけられているが、すでに述べたように、書院は日本の国策の学校ではなく、民間の私立学校であったこと、書院の経営母体である東亜同文会の会長近衛篤麿は藩閥政権である明治政府を好まず、明治政府も外務省も書院および経営母体の東亜同文会には冷淡であったこと、それは途中で設置した農工科を財政難で閉鎖せざるを得なくなった一方で、本来の中華学生部の設置を優先させたこと、そして書院はいろいろな学生を受け入れ、軍部の圧力に対しても院長達はリベラルな校風を維持したこと、それゆえ、書院の学生を通じて民国の学生に社会主義思想が伝わり、書院内の中華学生部の寮に中国共産党上海支部の拠点まで出来たりしたこと、そのため一部学生は日本当局に逮捕されたりしたこと、などから見ても日本帝国主義からはかなり縁遠い存在であったことがわかる。

ただし、1937 年、校舎が焼かれ、やむなく交通大学を借用せざるを得なかったこと、最後の戦局の厳しくなった中で、1943 年、これもやむなく、国策の圧力により学徒出陣に参加したことは、学長・院長にとって不本意なことであった。そのため、最後の学長・院長であった本間喜一は戦場に学生を送ってしまったことを後悔し、戦後、より自由と民主主義を守るなかでの国際人の養成と地域文化への貢献を掲げ、書院を継承しつつ、愛知大学を設立した[19]のである。したがって、緊迫状況に追い込まれた書院最後の時期だけの対応から書院の性格を日本帝国主義下の学校というのは、かなり観念的で、違和感があり、事の本質を見えなくしているように思われる。筆者の 40 年余

りの書院生の大旅行そして書院研究からの見解である。

---

[1] 藤田佳久（2012）「日中に懸けるー東亜同文書院の群像ー」、中日新聞社、97-100。
藤田佳久（2019）「荒生精と日清貿易研究所ーそのビジネススクール化をめぐってー」、「日中関係の未来図ー歴史から考えるー」、霞山会、23-66。

[2] Douglas R.Reynolds(2010)"TO-A Dobun Shoin-Yet another Meiji Innovation",Annual Report of Open Research Center of Toa Dobun Shoin Memorial Center, Aichi,2009 years edition. 9-18.
Douglas Reynolds(2014)"EAST MEETS EAST"、—Chinese Discover Modern World In Japan, 1854~1898,A Window on the Intellectual and Social Transformatic of Modern China.

[3] 藤田佳久（1994）「中国との出会い」、東亜同文書院中国大調査旅行記録、第 1 巻。大明堂、不二出版発売。284。

[4] 藤田佳久（1995）「中国を歩く」、東亜同文書院中国調査旅行記録、第 2 巻、大明堂、不二出版販売。847。
藤田佳久（1998）「中国を越えて（東南アジア）」、東亜同文書院中国大調査旅行記録、第 3 巻、大明堂、不二出版販売。689。
藤田佳久（2002）「中国を記録する」、東亜同文書院中国大調査旅行記録、第 4 巻、第 4 巻、大明堂、不二出版販売。580。
藤田佳久（2011）「満州を駆ける」東亜同文書院中国大調査旅行記録、第 5 巻、不二出版。607。
藤田佳久（2000）「東亜同文書院中国大調査旅行の研究」、大明堂。349。
藤田佳久（2007）「東亜同文書院生が記録した近代中国」、あるむ。61。
藤田佳久（2011）「東亞同文書院生が記録した近代中国の地域像」、ナカニシヤ出版。330。
Yoshihisa Fujita（2011）　"Toa Dobun Shoin College its Deveropment ,Great journeys and to Aichi University"あるむ（ARUMU）45。
藤田佳久（1993）「「幻」ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」、「東亜同文書院大学と愛知大学ー1940 年代・学生たちの青春群像ー」、第 1 集、六甲出版、所収。（そのほかの関連論文は略）

[5] 馮天瑜・劉柏林（2002）「東亞同文書院の中国調査の評価と分析」、「中国 21」、13 号、191~208。
加納寛編（2017）「書院生、アジアを行く」、あるむ、273。

[6] 高木秀和（2009）「東亞同文書院生が記録した 1910 年代の内蒙古東部の地域像」、愛知大学東亜同文書院大学記念センター「オープン・リサーチ・センター」、3 号、所収、379~405。高木はほかにも同地域にいくつかアプローチしている。

[7] 東亜同文会編（1907~1908）「支那経済全書」、全 12 巻、東亜同文会編纂局。

[8] 日清貿易研究所編輯（1892）「清国通商綜覧」、全 3 巻、丸善商社書店。1060、665、605。

[9] 根岸佶（1953）「中国のギルド」、日本評論新社、488。

[10] 藤田佳久（1991）「波多野養作の中国・西域踏査旅行についてー東亜同文書院の中国調査旅行の契機となった踏査旅行記録からー」、「愛知大学国際問題研究所紀要」、第 94 号、（なお、藤田佳久（2000）、「東亜同文書院中国大調査旅行の研究」、80-149、大明堂刊、に収録）。

[11] 前掲 1（2012）

[12] 東亜同文会（1917~1920）「支那省別全誌」、全 18 巻、東亞同文会。

[13] 東亜同文会（1941~1944）「新修支那省別全誌」、計画 23 巻のうち 9 巻で中止。

[14] W.スキナー（1979）「中国農村の市場・社会構造」、（今井誠一訳）、法律文化社、222。

[15] 藤田佳久（2001）「東亜同文書院卒業生の軌跡ー東亜同文書院卒業生へのアンケートからー」、愛

知大学東亜同文書院大学記念センター「同文書院記念報」Vol.9、1-72。

[16] 藤田佳久（2017）「東亜同文書院・同大学卒業生の軌跡と戦後日本の経済発展」、愛知大学東亜同文書院大学記念センター「同文書院記念報」、Vol.25、45-63。

[17] 戦後台湾で復刻された解説。

[18] 愛知大学東亜同文書院大学記念センター（2009）シンポジウム「欧米研究者から見た東亜同文書院」、同センター「オープン・リサーチ・センター年報」、4 号、所収。ちなみにその関係分では、「明治のもう一つの革新的パイオニアとしての東亜同文書院」（D.R.レイノルズ）、「20 世紀前半期のヨーロッパ人の東亜同文書院に対する知識と視点」（M.B.ブルギエール）、「ミシガン大学における書院及びアジア系文献資料のグーグル化」（ニキ・ケンジ）、「戦後欧米における書院研究」（武井義和）

[19] 愛知大学東亜同文書院大学記念センター編（2007）「愛知大学創成期の群像」（兼写真集）、同センター。53。

［謝辞］

なお、本稿を作成するに当たり、本年度文科省科学研究費（地理学、基盤研究 C）の一部を利用した。

また、これまでの筆者の長年の書院研究にたいし、筆者に多方面からご協力いただいた書院卒業生の方々、解散前の滬友会の会長はじめ皆様には、厚くお礼申しあげます。

本稿は中国国家プロジェクトの『日中文化交流史叢書・遊歴紀行編』への求めに応じた寄稿原稿をベースにし、原稿に図版をふやし、加筆してまとめたものである。このようなまとめの機会をつくっていただいた日本国際文化センターの榎本渉准教授に謝意を表したい。